

黒崎 勇教授退職記念論集に寄せて

中 村 耕 二

この度、甲南大学教授黒崎 勇先生のご退職に際し、黒崎 勇教授退職記念号として国際言語文化センター紀要を発刊できることを誠に光栄に存じます。黒崎先生は国際言語文化センター設立の準備段階から常に中心的役割を果たしてこられました。先生は初代所長のみならず、通算5年間にわたりセンター所長として、甲南大学における外国語教育と言語文化教育に新たな方向性を示され、教育研究及び大学行政においてご活躍をなさいました。

黒崎 勇先生は甲南大学に42年勤務され、ドイツ文学、ドイツ哲学、ドイツ文化研究、ドイツ語教育など、幅広い専門分野での教育研究に多大の貢献をされ、さらに、教育行政面では国際言語文化センター所長、教養委員長、図書館長などを歴任されました。

さらに、国際人として、また文化人として黒崎先生は世界を舞台にして活躍してこられました。先生がドイツ連邦共和国より功労勲章一等功労十字章を与えられ、在神戸名誉領事として、両国の国際交流、文化交流、学術交流に著しい貢献をされたことは、大学はもとより両国の市民の知るところであります。

国際言語文化センターにおいて黒崎先生にご指導を受けた者の一人として、また、氏を尊敬するセンターの専任教員の一人として、黒崎先生の42年間にわたるご功績の軌跡を振り返ることは多言語、多国籍の教員から構成された教授会組織を持つ国際言語文化センターにとっては極めて意義深いことだと考えます。

黒崎 勇先生は昭和32年に甲南大学文理学部を優秀な成績で卒業され、甲南高等学校でドイツ語の教鞭をとられた後、昭和35年より甲南大学文学部の助手を務め、その後1年半にわたりドイツに留学されました。現地ではドイツ文学、ドイツ語教育研究に打ち込まれ、国際人としての見識をさらに高められました。昭和38年には専任講師、昭和43年に助教授、そして昭和50年以來27年間にわたり甲南大学教授として学問と教育に勤しまれ、多くの優秀な学徒を世に送り出されました。

黒崎先生は6冊の著書と12の論文を出版なさり、中でもとりわけ、『バイエルンの町と芸術』1995（朝日出版）はバイエルンの町とその町の芸術を紹介しながらドイツ語を学ぶ著書で、ドイツ文化と事情に精通された黒崎先生の独創性に富むものです。これはドイツ語の総合テキストとして黒崎先生の企画、編集によりビデオとオーディオテープが付いており、幅広い読者層を有しております。また、『ミュンヘン』1982（朝日出版）はミュンヘンの写真と日本語解説を加え、ミュンヘンをテーマとしたドイツ語の総合的な読本であり、

学習者をミュンヘンの世界へ誘う魅力的な著書です。その他、『図解ドイツ語会話』1969（海文堂出版）、『Eine Kleine Geschichte von Taro und Erika』1973（朝日出版）、『ドイツ文法ABC』1974（朝日出版）、『そんなにドイツ語は難しくない』1985（白水社）などいずれの著書もドイツ語・ドイツ文化、ドイツ国民への理解を深めるもので、先生のドイツに対する造詣の深さを示しております。

一方、黒崎先生の多くの論文は中世ドイツ文学や中世のドイツの詩を理解する上で貴重な考察と論考に溢れています。ハルトマン・フォン・アウエやデア・フォン・キュレンベルクをはじめドイツ宮廷作家や歌人達の詩の訳とその特質の論考、ハルトマンのミンネザングの特質やミンネザングの変遷の問題点に対するいくつかの論考、中世ドイツ最大詩人と言われるヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの格言詩の問題を明らかにした論考、ヴァルターのミンネ観への鋭い考察、さらにヴァルターの詩と中世期ドイツ最大の宮廷歌人であるラインマルの詩を比較検討したいくつかの論考など中世ドイツの多くの詩歌を鋭く論じておられます。また、日本におけるドイツ中世文学研究の紹介や日本におけるドイツ語教育の変遷について書かれた論文も多くあります。いずれの著書や論文も黒崎先生のドイツ文学、ドイツの詩歌、ドイツ国民文化への深い洞察が見られ、それぞれの論文はドイツの詩歌を心から愛され、論じておられる黒崎先生ご自身の文学表象と思われれます。

一方、大学行政においては、教養課程運営委員会委員、国際言語文化センター準備委員会委員、国際言語文化センター運営協議会委員、言語教育アドバイザー・コミティ、入試制度検討委員会委員、新図書館建設実行委員会委員、入学試験実施委員会委員をはじめ各種委員、会議委員及びさまざまな要職に就かれました。昭和44年に教務部参与、昭和53年に教養委員長、昭和60年から2年にわたり図書館長を勤められ、平成6年から3年間、さらに、平成11年から2年間にわたり国際言語文化センター所長として、甲南大学独自の外国語教育及び言語文化教育の基礎を築かれました。

特に、甲南大学の外国語及び言語文化教育の中枢機関として、独立した教授会組織を有する国際言語文化センターの設立までのご尽力とその後の組織運営へのご努力は想像を絶するものであります。その長年にわたる黒崎先生のご努力の結果として、今日も我々が主体的に外国語教育と言語文化教育に専念できるのであります。当時の学長サイドや各学部との連携を重視され、先見性のある強いリーダーシップがあったからこそ、今のセンターが外国語教授法・日本語教授法の開発、カリキュラム・教材開発に従事でき、200人以上を超える各言語の担当者との連絡調整、連携を図り、本大学の外国語教育、言語文化教育の中枢機関として有効に機能していると言えます。さらに、黒崎先生は生涯教育や留学生教育を重視され、毎週土曜日の社会人講習会「言語講座」（英語・ドイツ語・フランス語・中国語）や夏期社会人講座「言語と文化」、留学生のための日本語の講義、夏期日本語集中講座等にも常に力を入れてこられました。

基礎外国語科目においては、小人数での外国語の授業、すべての入学生が体験する視聴覚

教室での授業、目標言語を母語とする教員の授業、ドイツ語を母語とする教師と日本人教師のペア授業などがあり、中・上級外国語科目ではドイツ事情、ドイツ語技能検定試験準備コース、フランス語検定準備コース、フランス語オーディオ・ヴィジュアル、実用中国語、中国語検定準備コース、韓国の文学作品、TOEFL、TOEIC、スピーチ・コミュニケーション、オーラル・コミュニケーションなどのクラスを開講してきました。さらに、従来の外国語科目の中・上級科目を学生のニーズに応じて幅広く増設して、(中級外国語科目21講座、上級外国語科目20講座) 授業内容を充実させてきました。さらに2001年度入学生より従来の広域副専攻科目に加え、新たに当センターが開設する国際言語文化科目 (A国際文化コース、B国際コミュニケーションコース、C-1ドイツ語・フランス語・中国語インテンシブコース、C-2英語インテンシブコース) を開講できたのは全学的なサポート体制と共に当時の所長であった黒崎先生の先見性と英断によるものと言えます。

黒崎先生は常に日本語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、英語の連携と共に各言語に共通する言語教授法・カリキュラム開発研究の重要性を力説されました。その理念と目的を推進するために先生は11回にわたり、言語教授法・カリキュラム開発研究会の開催に努力されてきました。特に上記の研究会が基盤になり、2002年の3月には甲南大学国際言語文化センターとベルリン・フンボルト大学アジア・アフリカ研究所、ベルリン・フンボルト大学ドイツ言語学研究所主催で甲南大学開学50周年記念事業「国際交流言語コロキウム『言語理論と言語教育』」をドイツの著名な言語学者をはじめ、海外からも多数の外国語教育と言語文化の研究者を招き、センター初の国際交流コロキウムとして開催するに至りました。この国際的な試みは黒崎先生の遠大な構想の基に計画され、ドイツ語と英語を研究発表の使用言語とし、きわめて学際的な会になりました。黒崎先生ご自身のご講演「グローバル化時代の言語と文化」をはじめ、甲南大学の言語文化教育を世界に向けて発信しました。又、ドイツの著名な言語学者であるE. コセリウ教授(チュービンゲン大学)やN. フリース教授(ベルリン・フンボルト大学)の公開講演をはじめ、多数の言語学者や言語教育者の講演や発表から多くを学び、成功裏に終わりました。

また、国際言語文化センターの外国語教育と言語文化教育のさらなる推進のため黒崎先生はセンター内に各言語分野の代表者と事務室担当職員から成る言語文化検討委員会を発足させ、現状に満足することなく常に自己点検と未来への挑戦を促されました。その斬新な進取の精神が今もセンター教員の心の中に生きており、黒崎先生から伝授された言語文化教育の系譜を若き研究者や教育者に継承し、今後の発展に努力していかねばならないと思います。

文化人として、また国際人としての黒崎先生のご活躍は神戸日独協会の歴史でもあります。黒崎先生は1979年に日独協会理事として神戸日独協会主催のドイツ研修旅行を引率され、1987年には日独協会の会長代理に、翌1988年には日独協会の理事長に任命されました。また、1996年には貝原兵庫県知事より国際交流の功績により表彰を受けられ、同年に在神戸ドイツ連邦共和国名誉領事に任命されました。1998年にはライプツィヒ大学と甲南

大学との学術交流や交換留学に多大の努力をされ、日独協会の主催で甲南大学の学生もライプツィヒ大学夏期ドイツ語集中講座に参加しました。1999年にはワイツゼッカー元ドイツ連邦共和国大統領ご夫妻やケストナー駐日大使を迎えての数々の歓迎行事を開催されました。日本とドイツの文化交流、学術交流へ賭ける黒崎先生的情熱は多くの人々の心を動かし、神戸市民にとってもドイツ文化を身近なものにしてくれました。

神戸日独協会の会報1996年12月号では黒崎先生がドイツ連邦共和国より在神戸名誉領事に任命された時の様子が以下のように描かれています。

『去る11月28日神戸外国倶楽部にて黒崎 勇理事長にディークマン駐日大使より、貝原兵庫県知事、笹山神戸市長、ブラウマン副総領事を初め各界代表の方々ご臨席のもとドイツ連邦共和国のヘルツォーク大統領の在神戸名誉領事任命書が授与された。ディークマン駐日大使は任命にあたって、「総領事館が大阪に移転してもドイツ政府が神戸を重視していることには変わりありません。その証として黒崎先生を名誉領事に任命しこれまでの友好関係を維持し発展させていくつもりです。先生は専門の研究、教育さらにはその枠を超え、神戸で日独両国の関係を促進していく事に多大なる業績をお持ちです。また、先生はドイツに大変精通されており両国のすばらしい架け橋となってくださるでしょう。これからも大使館、領事館は全力で先生を支援していくつもりです。』と述べられた。

引き続き黒崎名誉領事主催でレセプションが催され、ディークマン駐日大使、貝原知事のご祝辞の後、笹山神戸市長の乾杯のご発声で始まりました。席上、黒崎 勇名誉領事は「思いがけなく与えられた名誉ある立場を通じ、神戸における120年の両国の友好関係をさらに深めるべくいささかなりとも貢献してまいる所存であります。公文書にあります“経済・文化・交流・司法分野における日独両国間の協力を援助する”という任務を力の限り果たす事をお誓い致します。以下省略」と今後の抱負を語られた。』

神戸日独協会報 1996年12月号より抜粋

上記の会報からも黒崎先生の文化人、国際人としての活躍のご様子や日独の国際交流・文化交流に対する使命感がうかがえます。

大学人である黒崎先生は甲南大学教授としてご専門であるドイツ文学・文化研究・ドイツ語教育をドイツ国民との交流・学術交流・文化交流に統合され、真の意味での国際理解と文化交流に42年を捧げられました。そのような国際的な視野と見識のある先生であったからこそ、全学的な立場からの外国語教育と言語文化教育の刷新を誰よりも認識され、その理念に従って文学部から移籍され、強い決意で国際言語文化センターの設立とその運営に教授としてご退職までの9年間を捧げられたのだと思います。後輩としての我々は黒崎先生への感謝の気持ちと尊敬の念で一杯です。

今後は黒崎先生が築かれた国際言語文化センターをさらに発展させるためにも先生が意図された初期の設立の目的と理念を今一度再確認し、甲南大学の全学的な言語文化教育の向上のために、教員と事務職員が一丸となって精進したく存じます。この度の黒崎先生退職記念

号が黒崎先生と共に歩んできた国際言語文化センターの歴史の節目として、いつまでも人々の心に記憶されることを願って、黒崎 勇先生への謝辞とさせていただきたいと思います。

平成14年 3月31日

甲南大学国際言語文化センター所長

中村耕二